

く見られる種であるため、本島での調査不足が浮き彫りになったといえる。本稿は7月中下旬の限られた期間の調査によるものであるため、季節や採集法をかえるなどして今後も継続して調査を行えば、さらに多くの種が見出されると予想される。

大平(2004)では、宮田ら(1977)を引用し、壱岐をヒメサビキコリ *Agrypnus (Colaulon) scrofa scrofa* (Candèze, 1873) の分布域に含め、さらにこれを確認の必要な分布疑問としているが、宮田ら(1977)の記録は沖ノ島(福岡県)からのものであり、本種の壱岐からの記録は無い。今坂(2012)では、九州大学・日本野生生物研究センター(1989)を引用し、壱岐産甲虫記録種リストにヒメサビキコリを含めているが、大元の引用文献は不明である。また松尾(2004, 2005)でも、壱岐からの記録を認めていないため、本種の記録を壱岐から除外した。

### 謝辞

末筆ながら、調査に協力していただいた伊藤玲央氏(大分県大分市)、吉田貴大氏(九州大学大学院生物資源環境科学府昆虫学教室)、長崎県にお

るコメツキムシ科の分布記録についてご助言をいただき、かつ貴重な資料を提供いただいた松尾照男氏(長崎県佐世保市)、文献の入手に協力いただいた今坂正一氏(福岡県久留米市)に厚くお礼申し上げます。

### 引用文献

- 今坂正一, 2012. 2009年6月壱岐の甲虫採集記—長崎県RED見直し調査の一環として、付き記録の纏め—。こがねむし, (78): 26–51.
- 大平仁夫, 2004. 日本産サビキコリ属の形態について(III)(甲虫目: コメツキムシ科, サビキコリ属, ヒメサビキコリ属). 比和科学博物館研究報告, (43): 67–89, 17 pls.
- 九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター, 1989. 日本産昆虫総目録, 1767 pp.
- 宮田彬・茂木幹義・瀬戸屋耕二・山本 優, 1977. 筑前・沖ノ島昆虫目録, pp. 561–594. In: 壱岐の生物—対馬との対比—. 638 pp., 長崎県生物学会.
- 松尾照男, 2004. 長崎県のコメツキムシ科甲虫類. こがねむし, (69): 6–48.
- 松尾照男, 2005. 長崎県産コメツキムシ科ヒメサビキコリ亜属の知見. 長崎県生物学会誌, (59): 21–31.

(2016年8月21日受領, 2016年9月23日受理)

### 【短報】 海浜性コメツキムシ2種の対照的な活動性

日本に分布するコメツキムシ科の中で、海浜に生息する種は5亜科で生じている。サビキコリ亜科とハナコメツキムシ亜科に属す海浜性種は、日本各地に広く分布し、篩を使った採集法やライトトラップなどで比較的容易に発見できることから数多の分布記録がある。しかし、分布記録の多さに対して、生息環境の選好性や季節消長といった生態に関する報告は少ない(有本, 2014; 大平・山本, 2016など)。筆者は、同所的に分布するサビキコリ亜科とハナコメツキムシ亜科に含まれる2種の海浜性コメツキムシ、スナサビキコリ *Meristhus (Sulcimerus) niponensis* Lewis, 1894 とアカアシコハナコメツキ *Paracardiophorus sequens sequens* (Candèze, 1873) を日中と夜間に観察し、対照的な生態が判明したためここに報告する。両種とも今坂(2012)において本島から初めて記録され、本記録が2例目となる。

調査地点は、長崎県壱岐市の串山海水浴場(図1)と大浜海水浴場である。どちらの浜も砕かれた貝類の粒子と砂利が混じった白砂で形成され、草本がまばらに生えている(図2)。

#### 1. スナサビキコリ *Meristhus (Sulcimerus) niponensis*

Lewis, 1894

51 exs., 長崎県壱岐市勝山町東触 串山海水浴場, 17. VII. 2016, 筆者・伊藤玲央採集, 筆者保管。

本種は、日中は砂中や根際の比較的深い部分に潜っており、夜間に活発に地表を徘徊していることがわかった(図3)。捕まえると、逃避行動として跳ねるが飛翔することはほとんどない。しかし、灯火には飛来することがある。

#### 2. アカアシコハナコメツキ *Paracardiophorus sequens sequens* (Candèze, 1873)

16 exs., 長崎県壱岐市勝山町東触 串山海水浴場, 17. VII. 2016, 筆者・伊藤玲央採集, 筆者保管; 10 exs., 長崎県壱岐市石田町筒城東触 大浜海水浴場, 18. VII. 2016, 筆者・伊藤玲央採集, 筆者保管。

本種も、砂中や根際に潜んでいるが、よりも表層に近い部分にいる。日中、まれに地表を歩いているのを観察できたが、隠れたまま動かない個体の方が多数であった(図4)。夜間には前種に見られるような徘徊行動は全く示さない。逃避行動として、非常によく跳ねるほか、活発に飛翔する。灯火には飛来することはない。

以上のとおり、両種は日中と夜間の活動性、飛



図1-4. 1, 長崎県壱岐市勝山町東触申山海水浴場; 2, 同所; 3, 夜間, 地表を徘徊するスナサビキコリ; 4, 日中, 草本の根際に潜むアカアシコハナコメツキ.

翔の頻度, 走光性といった点で異なる性質を持つ。またスナサビキコリはアカアシコハナコメツキよりも砂浜の深い部分に潜り込んでおり, 同所的に分布しているが微細な棲み分けをしていることが示唆された。

調査地でのアカアシコハナコメツキの個体数はあまり多くはなく, 分布はまばらで, 近縁種であるトカラアカアシコハナコメツキ *Paracardiophorus tokara tokara* Nakane & Kishii, 1955に見られるような集合性は観察できなかった(有本, 2014)。トカラアカアシコハナコメツキでは礫と植物が適度に混在して覆われる場所に多くの個体が集中して生息していることが判明しており(有本, 2014), アカアシコハナコメツキも同様の環境をより好むと予想されたが, 今回の調査では類似の環境を見出すことができなかった。調査を実施した浜はアカアシコハナコメツキにとっては最も好む生息環境ではなかったことが個体数の少なさと関連していると考えられる。

末筆ながら, 調査に協力いただいた伊藤玲央氏(大分県大分市)に厚く御礼申し上げる。

#### 引用文献

有本晃一, 2014. 沖縄島の海浜におけるコメツキムシ科甲虫

3種の記録と生息環境. さやばねニューシリーズ, (16): 38-39.

今坂正一, 2012. 2009年6月壱岐の甲虫採集記—長崎県RED見直し調査の一環として, 付き記録の纏め一. こがねむし, (78): 26-51.

大平仁夫・山本英治, 2016. コガタヒメサビキコリの越冬生態. 月刊むし, (540): 50-51.

(有本晃一 812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1 九州大学大学院生物資源環境科学府昆虫学教室)